

『ライ麦畑でつかまえて』の英語

杉 浦 銀 策

はじめに

J. D. サリンジャー(J.D.Salinger, 1919-)の唯一の長篇である『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*, 1951)は、マーク・トウェイン(Mark Twain, 1853-1910)の『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1884; 1885)という先行作品の語りの伝統がなかったら、はたしてその成立が可能であったかどうか疑わしいと言っても過言ではないであろう。つまり語り手にして主人公でもある十三、四歳の少年ハックルベリー・フィンがアメリカ南西部の方言によって全篇の物語を語りつくし、またそうすることによって奇跡的な成功を収め、かつアメリカ文学史における輝かしい古典としての地位を獲得したという事実があったからこそ、二十世紀中葉の作家サリンジャーもまた、安心して十六、七歳の少年ホールデン・コールフィールドを語り手兼主人公として物語に登場させ、かつニューヨーク市を中心とした都会のティーンエイジャーの卑俗な仲間言葉(vernacular)によって全篇を充満させることができたのであろうと想像されるのだ。

ハック・フィンは十九世紀前半、ミズーリ州の片田舎に生まれ育った浮浪児、数カ月の学校教育しか受けていない無知な少年ということにはなっているが、同時に反面なかなかの知識、教養を持った少年としても描かれる。たとえば第四章では、サッチャー判事とハックの間で次のようなやり取りが行われる。

I says, "Don't you ask me no questions about it, please. You'll take it—won't

you?"

He says:

"Well I'm puzzled. Is something the matter?"

"Please take it," says I, "and don't ask me nothing—then I won't have to tell no lies."¹

おらは言っただけ。「どうかこのことについては何も訊かないで下さい。(お金を)受け取ってくれますね？」

彼は言った。

「いやあ、何がなんだか分からんね。何があったのかね？」

「どうか受け取って下さい」とおらが言った。「そして何も訊かないで下さい——そうすれば、嘘をつかないですみますから」

じつはこのハックの受け答えの背後には、“Ask me no questions and I'll tell you no lies.”というイギリスの古い諺が隠されているのだ。²

またこういうこともあった。逃亡奴隷のジムがハックと二人でミシシッピ川を下り、ケイロ(Cairo)辺りを通りかかった(と思った)とき、己の自由が目前に迫ってきたと錯覚した彼は急に元気づいて、自分の妻子を買い戻すつもりだと言い出す。そしてもしそれができなければ、奴隷制廃止論者に頼み込んででも取り戻すと空恐ろしいことを口走る。これを聞いて、ハックはこう呟く——“[G]ive a nigger an inch and he'll take an ell.” (XVI, 124) (黒んぼはちょっと親切にしてやると、すぐつけ上がる)。むろんこれは“Give him [knaves] an inch and he [they] will take an ell.” (寸を与えれば、尺を望む)という諺をもじったものだ。『ハック・フィン』の言語的豊饒さが、このような主人公の隠れた知識や教養に負うところが多いことはいうまでもない。

一方の『ライ麦畑でつかまえて』はどうかというと、主人公のホールデンはニューヨーク市のマンハッタンで生まれ育った、十六歳のプレップスクールの生徒である。ただし語り手としては十七歳。すでに二、三のハイスクールを中途退学させられた経験を持ち、いままた五課目を履修し、そのうちの歴史を含む四課目を落としての中退ということで、落ちこぼれの少年という印象を与える。しかし彼は日本でいう〈国語〉はよくできて、特にアントリーニ先生の言葉を借りれば、「若き作文の秀才」(you little ace composition writer)³ということになる。それにシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』、モームの『人間の絆』、ハーディの『帰郷』、フィッツ

ジェラルドの『偉大なるギャッツビー』、リング・ラードナー等の愛読者であるとともに、新約聖書の注意深い読者でもある。要するに彼は、第二次世界大戦後の大都会に住みながら、生きのいいスラングを機関銃のように連発する文学少年なのである。

言語的豊饒さという面で『ハック・フィン』と『ライ麦畑』を比較したならば、前者の方に軍配が上がるかもしれない。その遠因は、『ハック・フィン』に描かれる世界が地域的にはミズーリとアーカンソーという二つの州にまたがり、社会的には多様な白人の大人や黒人奴隷を巻き込むどころか、ときには凄惨な流血事件をも含むうえに、すでに見たようにハックが知識や言葉の点でも等身大以上に描かれているといった諸々の事柄に求められるであろう。

二十世紀の作家は十九世紀の作家以上に一種の芸術的純粋性とストイシズムを要求されるとでもいうかのように、『ライ麦畑』のサリンジャーは、後期の〈グラス家物語〉のシーモア・グラスの場合とは違って、厳密に等身大のホールデン・コールフィールドを描こうとする。ホールデンはあくまでもホールデン自身の知識と教養の限界内で描かれ、その枠を超えて大人の知識をひけらかすことはしない。そしてそれだけ彼の語りの言語、つまり語りの中の語彙と語法は一定の限界内に収まったものとなる。『ハック・フィン』ほどに言語の豊饒さが感じられない所以であろう。

このようにホールデンの英語表現の細目は必ずしも豊かな独創性に彩られているとはいえず、むしろ使い古された言い回しを効果的にこなして出来上がった文体と言った方が当を得ているかも知れない。

またハックの英語が十九世紀前半のアメリカ南西部の方言が中心になっているのに対して、ホールデンの語りに出てくる英語は二十世紀半ばの都会的なスラングが母体となっている。したがって『ハック・フィン』と『ライ麦畑』における口語的英語表現には類似している点と異なっている点、つまりアメリカ英語の歴史における口語表現の連続と断絶が同時に見られるといえよう。本稿では特に両者の対比に力点を置くつもりはないのだが、随所でそれとなく暗示されるはずである。

さて、『ライ麦畑』の英語を本格的に論じたものに、ドナルド・P・コステロ(Donald P. Costello)という人の「『ライ麦畑でつかまえて』の言語」(“The Language of ‘The Catcher in the Rye’”)⁴がある。

コステロ氏はこの論文の中でまず次のように述べる——「今日われわれはマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』を偉大な文学

作品としてのみならず、一八八四年の方言の貴重な研究資料としても研究する。私が思うに、あと数十年もすれば、『ライ麦畑でつかまえて』は文学作品としてのみならず、一九五〇年代のティーンエイジャーたちの仲間言葉(teenage vernacular)の例としても研究されることになるだろう」と。⁵

一八八四年というのは『ハック・フィン』がイギリスで出版された年のことで、コステロ氏の「一八八四年の方言」という言い方は不正確である。正確には作者マーク・トウェインの少年時代、すなわち一八三〇年から四〇年代にかけてのアメリカ南西部方言云々と言うべきであろう。しかしそれはそれとして、そのようなコステロ氏の見解には、かつての『ハック・フィン』の英語のいくつかがそうであったように、『ライ麦畑』の英語の一部もそのままの形で永久に使われつづけるわけではなく、やがては過去の遺物的存在になるだろうという前提がある。⁶

二十世紀も終わりに近づいた今日、『ライ麦畑』が刊行されてからすでに五十年近く経過したが、氏の予言的発言が当たったといえるだろうか。どうやら当たらなかったような気がする。ホールデンの語りに見られるさまざまな語彙や語句は、決して突発的に出現したのではなく、それぞれそれなりの歴史の重みを担っているるのであって、そう簡単に消えるはずもないのである。

たとえば『ハック・フィン』における、'bulrusher'(I, 18)や'scar'(II, 24)のようにいわば突発的に出現し、そして時とともに過去の遺物となった例は、『ライ麦畑』ではほとんど見られないのである。

またコステロ氏はこうも言う——『ライ麦畑』が出版された当時の書評、つまり『ニューズウィーク』、『ネーション』その他の雑誌に掲載された書評を二十点ほど点検してみた結果、「十六歳の語り手であるホールデンの英語は、同時代の読者の耳には、知的で教養あるアメリカ北東部出身の若者の話し言葉を正確に書き表したものとして響いた」という結論に達したと。そしてさらに彼は言葉をつづけて、『ライ麦畑』の文体は一九五〇年代における典型的なティーンエイジャーの常套句に、ホールデンという個性豊かな少年特有の言語表現がミックスして出来上がったものだとも主張する。

コステロ氏のこうした指摘はおそらく間違っていないだろう。ただ一九四〇年代末期から五〇年代初期にかけて使われていた高校生の話し言葉とは正確にどのようなものであったか、そしてそれが『ライ麦畑』で描かれた通りのものであったとしても、そうしたいわゆるキャンパス・スラング

(*campus slang*)もどきものが同時代の一般的なスラング(*general American slang*)的言い回しと厳密にどう異なるのか、あるいはまたそれが一九三〇年代や四〇年代、あるいは六〇年代、七〇年代の口語的、俗語的、ないしは方言的表現とどう異なるのか、などの問題ともなれば、研究者は大変な困難に遭遇するはずである。コストロ氏にしても、そういうところまで研究領域を広げて考察しているわけではない。

わが国に目を向けてみると、優れた英語学者の安藤貞雄氏が『英語語法研究』の中に三十八ページに及ぶ長さの、非常に示唆的な論考「*The Catcher in the Rye*の英語——Holden少年の言葉を中心に」を収めている。この研究書は昭和四十四年の刊行で、コストロ氏の論文よりも十四年後ということになるものの、今から振り返るとずいぶん早い時期の労作である。コストロ論文同様、教えられるところきわめて多かったことはいうまでもない。ただコストロ氏の論文では、たとえば不敬語(*swearword*)たる'*Jesus Christ*'への言及はあっても、'*Jesus H. Christ*'が無視されているといったことに若干の不满をおぼえざるを得ない。また安藤氏の論考については、たとえば'*like as if*'について、

以上の例に見える *like as if* という表現も、Holdenのものであるが、標準英語では、*like* は不要のところである。この用法は、普通の辞書には見当たらないが、Webster₃には、“Chiefly dial.” (おもに方言)として載っている。⁸

という説明にとどまっている。しかしこの成句は元来イギリスで古くから使われてきたものであるからには、そうしたことへの言及も不可欠であると私は思うのである。

本稿は、コストロ氏や安藤氏の向こうを張ってなにがしがの独創的な見解を發表しようとするものではもちろんない。ただそのようなささやかな不満から出発して、私自身が『ライ麦畑』を何度か繰り返して読んだ後、この作品に見られるいくつかの特異な英語の単語、成句、言い回しに注意を向け、それらについて自分がどのように感じたか、またそうした口語的、非標準的、俗語的、ないしは方言的表現のどのような側面を面白いと感じたか、あるいはそうした表現のどのような部分についてよく理解できなかったか、つまりどのようなことが疑問点として残ったか、などについて体

系的、系統的というよりは、むしろエッセイ風ないしは雑文風に書きつらねながら、できればホールデンの英語を一種の英語史的なコンテキストの中において眺めたいと思うのである。(とはいっても、英語学の素養に欠ける私のこと、結果的には素人的発想を楽しむにすぎず、底の浅い、見当違いな考察を展開することになる虞れもなしとしない)

最後にもう一言。先に私は不注意にも、ホールデンの英語表現について「使い古された言い回しを効果的にこなして出来上がった文体」と言ってしまうが、「使い古された言い回し」とはどういうことか、明確に定義づける自信があるわけではない。考えてみれば、多くの作家たちはむしろ使い古された表現を効果的に使って優れた文学作品を書いてきたわけで、たとえばグレアム・グリーン【おとなしいアメリカ人】(*The Quiet American*, 1955)は派手な、あるいは奇抜な言い回しが皆無であるにもかかわらず、広い意味でのヴェトナム戦争小説の傑作たり得ている。これに比べれば、「ライ麦畑」ははるかに新奇な(と読者に感じられる)表現に満ちている。ただ私が言いたかったことは、そうした新奇なと思われる言い回しもよく調べてみると、すでにイギリスに古い起源を持ち、それなりの歴史を背負った語句であることが判明するというで、その意味で「使い古した言い回し」という言い方をしたのである。それにしても「ライ麦畑」が、十七歳の少年の語りには、まことに多彩な表現に満ちあふれているという事実は否定できない。

注

- 1 Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (1885; N.Y. : Charles L. Webster and Co. [A Facsimil of the First Edition, Chandler Publishing Co., 1962], IV, 35-6. 『ハック・フィン』からの引用については、このテキストの章数とページ数を本文内に示す。
- 2 Cf. Michael Patrick Hearn, ed., *The Annotated Huckleberry Finn* (N.Y.: Clarkson N. Potter, Inc./Publishers, 1981), 77. 編注者はこのイギリスの諺について、Oliver Goldsmith, *She Stoops to Conquer* (1773), Act III, scene iを参照せよ、と述べている。なおこの諺はイギリスの一般庶民の間でも広く知られているものらしく、たとえばディケンズの『大いなる遺産』の中で、孤児のピップがしつこく質問するのに苛立つ姉は言う—「あれこれ尋ねなければ、嘘を聞かされることもないのに」(“Ask no questions, and you'll be told no lies.” Cf. Charles Dickens, *Great Expectations* (1861; Penguin Books, 1955), 15.
- 3 J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye* (Boston: Little, Brown and Co., 1951), 237. [Little,

Brown Books (1991),182.] 以下『ライ麦畑でつかまえて』の引用については、初版のページ数とともに、一般に利用されているリトル・ブラウン社のペーパーバック版のページ数をも併せて本文内に示す。

- 4 *American Speech*, XXXIV, 3 (October 1959), 172-81.
- 5 *Ibid.*, 172.
- 6 コステロ氏はこれを「…a type of speech rarely made available in permanent form. という言い方で示唆している。 *Ibid.*
- 7 『ハック・フィン』に出てくる“Moses and the Bulrushers”の'bulrusher'は『英語方言辞典』(Joseph Wright, *English Dialect Dictionary*, 1898-1905; Reissue, 1923)にもあるように(bulrusher, Nhb, sb. A bulrush)、もともとはイギリス方言であったものが海を渡ってアメリカ方言となり、ハックとともに文学的に甦ったのである。(“Perhaps this *dial.* form found its way to America.” Cf. Robert L. Ramsay and Frances G. Emberson, *A Mark Twain Lexicon* (1930; Rpt. Tokyo:Meicho-Fukyu-Kai Publishing Co., Ltd, 1985)。また『アメリカ方言辞典』(Harold Wentworth, *American Dialect Dictionary*, 1944; Rpt. Tokyo:Meicho-Fukyu-Kai Publishing Co., Ltd, 1981)はこの語について『ハック・フィン』からの用例のみを挙げている。同じく『ハック・フィン』における“the big scar on the hillside”の'scar'については *A Mark Twain Lexicon*によれば、『ハック・フィン』独特のものだという。
 なお『英語方言辞典』および『アメリカ方言辞典』については、以下それぞれ EDD および ADD と略す。
- 8 安藤貞雄氏『英語語法研究』(研究社：昭和44年),154.

その一 '...and all'を中心に

If you really want to hear about it, the first thing you'll probably want to know is where I was born, and what my lousy childhood was like, and how my parents were occupied and all before they had me, and all that David Copperfield kind of crap, but I don't feel like going into it, if you want to know the truth. (3; 1)

もしあなた方が本当にこの話を聞きたいと思うならば、まず第一にぼくがどこに生まれたかとか、ぼくのつまらない幼年時代はどんなものだったかとか、またぼくが生まれる前に両親が何をやっていたかとか、そういったデイヴィッド・コパフィールド風のくだらない話を知りたがるかもしれないけど、実を言うとぼくは、そんなことは話した

くないんだ。

これは『ライ麦畑』の書き出しの文章である。

これを読んでまず気付くことは、この冒頭のわずか数行の文章の中に作品の英語の文体的特徴が集約的に表されているということだ。たとえば「あなた方が本当に聞きたいと思うならば」(If you really want to hear about it)、「おそらくまず第一に知りたいと思うことは」(the first thing you'll probably want to know)、「本当のことを知りたいならば」(if you want to know the truth)といった、ほとんど同じような意味の語句の反復、繰り返しが三回もなされ、いかにも冗長、冗漫といった印象を免れ得ない。しかし同時に語りのテンポ、文章の流れ、軽快さなどがそうした反復、繰り返しによって意外なほどに損なわれてはいないということも確かである。これは不思議なことだ。しかもこうした特徴は作品全体にわたって一貫して持続されている。

すでに述べたように主人公ホールデンはプレップスクールの三年生。その彼がペンシルベニア州にある名門校ペンシー・プレップを中途退学になって、ニューヨークのマンハッタンを三日ほど放浪したあと自宅に帰り、その後カリフォルニアで何カ月か静養し、心身の調子も回復する。こうして精神的なゆとりができたところで、彼は過ぎし日の学校生活や寮生活、それからニューヨーク市内での放浪の数日などについて回想し、それを兄のD.B.コールフィールドに語る。これが『ライ麦畑』の物語というわけであるが、私たちはこれを読み進むうちに次第に彼の性格を理解し、そして彼の性格がいかにかこの語りの特徴とうまくマッチしているかに気付かされる。

ホールデン少年は偽善的な大人の社会に対して徹底した反抗的姿勢を取りつづけるはするが、その反面そうした自分自身について必ずしも自信があるわけではない。したがって彼はそうした自分の反抗的姿勢を大人たちの面前に向かってあからさまに、あるいは暴力的にぶつけてゆくことはつとめてこれを避けようとする。たとえば、ホールデンはあるバーで兄D.B.コールフィールドの女友だちリリアン・シモンズに偶然でくわし、やがてその女の連れである海軍将校とも別れの言葉を述べ合うことになる。そして次のように述懐する。

ぼくは会っても嬉しくもなんともない誰かに向かって「お目にかかれ

て嬉しかった」(“Glad to've met you”)といつも言っている。でも、生きていきたいと思えば([if] you want to stay alive)、こういうことも言わないわけにはいかないんだ。(114; 87)

ホールデンはどんなに世の中がいやになっても、「生きのびたい」のである。

また彼は、彼の歴史の課目に落第点をつけたスペンサー先生に対してもまともに不満をぶつけようはしない。「自分が先生の立場だったら同じことをしたでしょう、教師であることがどんなに大変なことか世間の人たちには分かっていません」(17;12-13)などと相手に対する気遣い、理解の言葉を懸命になって述べたて、その場の気まずい雰囲気但至少でも和らげようと努力する。

「人生は競技だよ、きみ。人生とは、誰しもルールにしたがってプレーする競技なんだ」

「はあ、そうです。ぼくも分かっています。分かっているんです」

(“Yes, sir. I know it is. I know it.”)(12; 8)

というぐあいには彼はさかんに相槌を打つ。しかしそうかといって本当に納得しているわけではもちろんない。いや心の中では納得どころではなく、反発さえしているのだ。「(人生は) 競技だって、とんでもない。たいした競技だよ」(Game, my ass. Some game 12;8)そして納得していない分だけ、いわば内的独白の形で自分の気持ちを吐露しながら抵抗しつづけるのである。

そうした反抗と順応の両面を併せ持つ複雑な、そして矛盾した性格の少年ホールデンは、読者に対してなにかしら斜に構えた態度を取る。彼は自分がいつどこで生まれ、どのような幼年時代を送り、両親がどのような仕事についていたか、といったことについて読者は知りたく思うだろうが、そういった詳しい自己紹介はしたくないと言う。しかし彼は、そうした自分の気持ちを単刀直入にまたぶっきらぼうに宣言するのではなく、いかにも冗長で回りくどい、弁明めいた言葉で切り出すのである。それは一口でいえば、ホールデンの性格的な優しさ、繊細さともいえるのだろうか。そして読者はこの優しさ、気配りに参り、ときには惚れ込むのである。「本当に知りたいと思うならば」云々といった余計な言葉の連発はそうしたホ

ールデンの性格と密接に結びついているものと考えられる。

上の引用文を読んでつぎに感じることは、徹底していただいた言い回し、俗語的な単語や語句をフルに活用しようとするホールデンの語りの姿勢である。「とかなんとか」を意味する'...and all'、「ぼくのつまらない幼年時代」(my lousy childhood)の'lousy'、「そういったデイヴィッド・コパフィールド風のくだらない話」(that David Copperfield kind of crap)における'crap'などが読者の目を惹く。当面これらの表現について、順を追って考察を重ねていくことになるであろう。

まず'...and all'について。一般的にいえば、これは俗語でも方言でもなく、ごく普通に使われる口語的表現であり、ここでわざわざ取り上げる必要もないように思われる。しかし『ライ麦畑』の場合もう少し複雑なというか、特異な側面を持っているような気がする。

この句は非常に古くから使われている語法で、『オックスフォード英語辞典』(Oxford English Dictionary)は、「そしてその他すべてそれと関連するあらゆること、等々」(And everything else, and everything connected therewith, et cetera)と定義づけて、次のような古い用例を挙げている。

1535 He will save Devils and all.

あのお方は悪魔も、何もかも救ってくださるであろう。

1662 Down came John, Pipe and all.

ジョンがパイプをくわえたりなんかしてやって来た。

これが英米の文学作品の中でつぎのように受け継がれてゆく。

It plucks out brains and all:---Shakespeare, *Othello*, II, i, 128.

脳味噌も何も引っぱがれそうです。

“It was master surgeon, him that ampytated me——out of college and all-Latin by the bucket, and what not;...”

——R.L. Stevenson, *Treasure Island* ²

「わしの脚を切断してくれたのは外科の名医でしてね、大学出やなんかで、ラテン語だってなんだってどっさり知っているんだ...」

I shot head first off of the bank, like a frog, clothes and all on...

服もなにも着っぱなしで、蛙のように土手から真っさかさまに飛びこんだ...。

—Huck Finn (VIII, 37)³

“I ain't never seen the sea before this time, Fred, an' it sort o' git my goat, all this sickness an' all....”

—John Dos Passos, *Three Soldiers*⁴

「フレッド、おれは海ってものを見たのはこれが初めてなんだ。それで興奮しちゃってこんな病気やなんかになっちゃった...」

先程最初に挙げたOEDの引用との関連で言えば、同辞典の'devil'の項に見られる説明、22. *The devil and all* : Everything right or wrong (especially the wrong) ; the whole confounded lot; all or everything bad:...からも分かるように、'all'の持つ意味の比重がかなり大きい。そして同じことは次の「ハック・フィン」からの引用についても言えるであろう。

“I want you to take it; I want to give it to you—the six thousand and all.”
(IV, 35)

「お金は判事さんが受け取ってください。六千ドルも何もかもあげたいんです」

この場合'...and all'は150ドル以上の利息も含めてということであるから、'all'も実質的な意味を担っていることになる。

これに対して二番目の用例'Pipe and all'の'all'の比重は非常に軽い。なくともかまわないようなものだ。

ところで【新ウェブスター・インターナショナル英語辞典第三版】(*Webster's Third New International Dictionary*, 1965)⁵は、'...and all'について二種類の意味を記している。

1) その他すべて、特に先行の陳述によって示唆された種類のいっさい (and everything else, esp of a kind suggested by a previous context <there he sat, pipe and all> (彼はパイプをくわえたりなんかしてそこに坐っていた) <exhausted and all as he was> —Gerrard MacDermott (すっかり疲れたりなんかしていたものだから [いたけれども]))

2) しばしば先行の陳述を強調するために用いられる (often used merely to emphasize a previous context) <her friends was a queer lot, and all>
—Richard Llewellyn (彼女の友だちは本当に変な連中だった)

研究社『新英和大辞典』(1980)は、この2)の意味について、WNID3の説明をそのまま踏襲して「[[単に先行の陳述を強調して] (英方言) 全く、実際(truly): <They were a queer lot, and all> (彼らは全く持っておかしな連中だった)』と記している。

以上のことを『ライ麦畑』における'...and all'に当てはめて考えれば、まず次の文章は既述のOEDの最初の例文や『オセロ』からの引用に相当する、と一応言えるかもしれない。

I also took a look out the window to see if all the perverts were still in action, but the lights and all were out now. (104; 80)

ぼくはまたあの変質者たちがまだ何かをやっているか見てみよう、と、窓から外を覗いてみたが、もう明かりも何も消えていた。

すでに引用済みの『ライ麦畑』冒頭の文章の中に見られる <were occupied and all> はWNID3の1)の二番目の用例 <exhausted and all as he was> に相当し、同じく『ライ麦畑』の第一ページに見られる <I mean that's all I told D. B. about, and he's my brother and all.> (3; 1) (つまりそれがD. B. に話したすべてさ。なんといいたって彼はぼくの兄貴だからね)の'...and all'はWHID3の説明の2)に相当すると言えないこともない。「先行の陳述を強調するためにのみ」用いられているからだ。しかしよく考えてみると、すでに'brother'はイタリックで強調されてしまっているから、強調のための'and all'というの、必ずしも妥当な説明とは言い切れないのである。

というわけで、ホールデンにおける'...and all'の使い方があまりにルーズなために (あるいはあまりに<気分的な>使い方なので、と言った方がよいかもしれないが)、それが名詞のあとに位置しようが、形容詞のあとに位置しようが、あるいは副詞や動詞のあとに位置しようが、ほとんど実質的な意味はなく、ただ語調をなんとなく強めたり、意味をぼかしたり、あるいは語りの流れとリズムを軽快にするためのものにすぎないのだ、と言った方がむしろ真実に近いようだ。

たとえばホールデンが第二十一章(214; 165)で妹のフィービーに向かって、

“I'll keep in touch with you and all when I'm gone, if I go.”

「もし行くとしたら、向こうから連絡やなんかを取るからね」

と言うとき、読者はこの'all'には家族のことも含まれているのかも、と一瞬思いはする。しかし第二十四章の終わりのあたりに'I told her I'd keep in touch with her.'(233; 180)とあるから、そうでないことが判明する。つまりフィービー一人のことを意味しているにすぎないのである。だがそうかといって、この'...and all'が「連絡を取る」と言う陳述を格別にく強調する>ために使われているとも思えない。

このことを、これまたホールデンの愛用する'...or something'の吟味によって検証してみることにしよう。

『ライ麦畑』の中の'...or something'は、'It keeps me from getting bored or something.'(31; 24) (そんなことをすると、退屈しのぎやなんかになるんだ)というぐあいに使われる。

ところで'...or something'について、『オックスフォード英語辞典補遺』(A Supplement to the Oxford English Dictionary)⁷はこのように定義している——'(colloq.), used to express an indistinct or unknown alternative'と。そして特に形容詞とともに述語的(predicative)に使用された例として次のような引用を行っている。

1926 Yet undoubtedly this man was drunk or ill, or something.

しかしこの男は間違いなく酔っぱらっていたか、あるいは病気だったりなんかしていたんだ。

このOEDSの定義が当てはまる例を『ライ麦畑』に求めるとすれば、次の引用が適切であろう。

What a school. You were always watching somebody cut their damn toenails or squeeze their pimples or something. (55; 42)

なんという学校だ。誰かが足の爪を切ったり、ニキビをつぶしたり、なんかそんなことばかりしょっちゅう見せつけられるんだから。

しかし『ライ麦畑』でホールデンが頻繁に使う'...or something'の大半は、ほとんど実質的な意味がない。たとえば次の例を見てみよう。

...and later on, if I wanted to get married or something, I'd meet this beautiful girl that was also a deaf-mute and we'd get married. (258; 199)

...やがて結婚やなんかしたくなったら、同じように唾でつんぼのきれいな女の子に会って、ふたりは結婚することになるだろう。

この場合「結婚相手は同じく唾でつんぼの女の子にする」ということを言いたいのであるから、'...or something'は無意味にひとしい。いやこの「結婚やなんか」には、たとえば〈恋愛〉なんかも含意としてあるのだという議論も成り立つかもしれないが、そのあとに「子どもが生まれたら」([if] we had any children,...)とあるからには、それも無理であろう。したがってこの'...or something'はその意味および使い方において、これまた彼が頻繁に使う'...at all'とほとんど変わらないのである。どちらもきわめてルーズに使われるために起こった結果として意味の同一性である。

ところで一九三二年六月、ルイス・キースという人が、「ジョンズ・ホプキンス大学の学生スラング」⁸のリストを発表し、その中に'...or something'を含めている。これを見て誰しも一瞬不思議に思うことであろう。ごく普通に、一般的に使われるようになっていたはずの'...or something'をなぜわざわざキャンパス・スラングの仲間入りさせなければならないのか、これが不思議に感じられるのである。

そこでキース教授の定義をあらためて読み返してみる。するとそこでは'or something—groping expression, often used to round off a sentence.'となっている。つまり私たちは、この定義が上記のOEDSのそれと微妙な食い違いを見せていることに気付くのである。一方は「それに代わる、別の何かはつきりしないもの」というのに対して、他方は「模索的な表現で、かつ陳述の調子を和らげる」となっている。それに後者の意味での'...or something'が学生たちの間でやたらと使われている、ということも教授は強調したかったのだろう。そしてわがホールデンもこれをかなりの頻度で使い、『ライ麦畑』の最初の三章だけでも十回ほど登場する。

そして'...or something'についてのキース教授の定義がそのまま'...and all'にも当てはまることはいうまでもない。

というわけで、ここで『ライ麦畑』の文体という面で最も重要な問題と

して浮上してくるものは、この作品の中で使用される'...and all'の頻度の多さということである。最初の三章だけで二十数回を数えるから、全篇を通していうならば、無数に近いと言っても過言ではあるまい。そしてこの特定の単語や語句の限りない多用や反復を文体上のしまりのなさ、冗漫さとして否定的に評価するか、それともそれをいわば一つの文学表現の様式化として積極的に評価するかは、ひとえに読者の受け止め方によって決まってくるであろう。

いや、この数えきれないほどに頻用される'...and all'に加えて、すでに述べたような'...or something'はむろんのこと、'...or some gaddam thing' (42; 32)、'...and stuff'、'...and stuff like that'、'...and that stuff'、'...and all stuff like that'、'...and crap'、'...and all that crap'、'...and all those things'、'...and like that'、'...or like that'、'...or anything'、さらには'...and everything'（これは特に妹のフィービーが好んで使う）等々も併用されるのだから、読者によってはうんざりした気分になる向きもあるやもしれない。

ただしここで注意すべきは、いま並べたてた数々の類似した言い回しのうち'...and all those things'だけは、ただ一回だけしか使われないという事実である。つまりホールデンは自らの会話の中で例外的に一回だけこれを使用しているということである。それは以下のようなカトリックの尼僧との会話で使われているものだ。

... “What have you read this year? I'd be very interested to know.” She was really nice.

“Well, most of the time we were on the Anglo-Saxons. Beowulf, and old Grendel, and all those things....” (144; 110)

... 「今年はどんなものを読まれました？大部分がアングロサクソンものでした。ベーオウルフとか例のグレンデル、そういったものでした」

この'...and all those things'⁹は、'...and all'、'...and stuff'、そして'...and crap'等が氾濫するホールデンの語りないしは会話にあってはことのほか際立って丁重な言い方に響く。つまりホールデンは二人の尼僧のうちの、英語の教師をしているという女性に対してのみ'...and all those things'を使用しているのである。

考えてみれば、『ライ麦畑』においてはほとんどあらゆる登場人物が'phony'か'nice'の相反する二種類に峻別される傾向にあったが、ここに登場

する二人のカトリックの尼さんはホールデンにとって'nice'の部類に属する存在であった。彼女らはこの世の汚濁に染まらない、いわば〈清静〉と〈清楚〉の象徴的な存在とあってよく、ホールデン少年にとって憧れの姿を表しているはずだ。これに反して物語の第十六章（そして本稿の〈その二'...and crap'その他について〉）において紹介される彼の伯母は、派手な服装で赤十字の慈善事業に専念する〈インチキ〉の典型的な女性である。

このように、ホールデンの言葉の使い方は、一面において冗漫な繰り返しに終始しているようでいて、注意深く読むと、意外ときめ細かなところもあるのだ。

とはいっても、これはあくまでも例外であって、全体的には'...and all'その他が圧倒的に作品を支配していることは否めない。そしてときには'...and all'と'...and like that'が併用されることもある。

Sometimes it was hard to believe, the people he said were flits and Lesbians and all, movie actors and like that. (186, 143)

時にはちょっと信じられないこともあった。彼がホモだのレズビアンだのと言っている連中、映画俳優だったりしてね。

これは既述のR.L. スティーヴンスンの『宝島』における'...and all'および'...and what not'の併用と共通するところがある。

'...and all'は地の文、つまりホールデンの語りにおいてはむろんのこと、彼自身の会話の中でも異常なほど多用される。ところがホールデン以外の登場人物はというと、意外なほどこれを使用することが少ない。

むろん次のような数個の例外はある。その一つは、第九章でホールデンが夜中に電話するフェイス・カヴェンディッシュという女の言葉。その二は、第十二章でホールデンの家鴨についての質問に苛立ったホーウィッツという運転手が言う言葉。その三は、第十七章においてマサチューセッツ州かヴァーモント州に駆け落ちめいたことをしようとホールデンに誘われて苛立つサリー・ヘイズの言葉。その四は、第二十三章でフィービーがホールデンにお金を貸す場面で言う言葉。その五は、第二十五章で学校にも行かずに博物館をうろついている下層階級の少年たちの言葉。

それぞれの順序にしたがって引用しておく、以下のようなになる。

1) "She just this minute closed her eyes and all." (85; 66)

「彼女、たったいま眼を閉じたばかりなのよ」

- 2) “Their *bodies*, for Chrissake—What's a matter with ya? Their bodies take in nutrition and all, right through the gaddam seaweed and crap that's in the ice.”

(108; 83)

「身体からだだよ、まったく。おめえ、どうなっちゃったんだ？ やつらの身体が栄養やなんかを取るんじゃねえか。氷の中の海藻やなんかからさ」

- 3) “I mean after you go to college and all, and if we should get married and all.” (172; 133)

「つまり大学やなんかへ行ったあとだっていいのよ。それにあたしたちが結婚なんかすることにでもなれば」

- 4) “Just my Christmas dough. For presents and all...” (232; 178)

「クリスマスのお小遣いだけなの。プレゼントやなんかを買うための」

- 5) You know. The *mummies*—them dead guys. That get buried in them toons and all.” (126;203)

「知ってるくせに。ミイラだよ——あの死んでいるやつ。墓なんかに埋められるやつのことだよ」

例外が五個にも及べ、例外ではなくなるのではないかと異義を唱える人もいるかもしれないが、対するホールデンの使用回数が無数に近いのであるから、やはり例外と言っても差し支えあるまい。

しかもここで注目すべきは、ホールデンと同じ寮生仲間であるストラドレーダーやアクリー、そしてその他の少なからぬ登場人物たちは、会話の中でほとんど‘...and all’を使わないということだ。ところがホールデンとなると、次の例に見られるように一挙に三回もたてつづけに使用することもある。

“Ballet and all. She used to practice about two hours every day, right in the middle of the hottest weather and all. She was worried that it might make her legs lousy—all thick and all.” (41; 31)

「バレエとかなんとかさ。どんなに暑いさかりやなんかでも、毎日二時間ばかり練習していたもんだ。脚が不格好になりゃしないか気にかけていたんだな——太ったりなんかしないかってね」

それに次のような変種もある。これもホールデンの会話の中の言葉である。サリーというガールフレンドに向かって、二人でニューヨークを出て、北に旅立とうと説得している場面である。

“What we could do is, tomorrow morning we could drive up to Massachusetts and Vermont, and all around there, see.” (171; 132)

「それでどうするかというと、明朝二人でマサチューセッツやヴァーモントやなんか、あの辺へドライブに出かけることだってできるんだよ、分かる？」

この'...and all around there'は、'...and all'と'...around there'をミックスして出来上がった言い回しである。いや、'...and'と'all around there'がミックスしたものだという異論も出るかもしれない。しかしホールデンはサリーと喧嘩別れしてから、どうして自分は彼女にあんなことを切り出したのかと反省しながら呟く言葉に次のようなものがあるのを考慮に入れた場合、やはり'...and all'の成句を重視せざるを得ないのである。

I mean about going away somewhere, to Massachusetts and Vermont and all. (174; 134)

つまりどこか、マサチューセッツとかヴァーモントとかへ出かけようという話のことだけど。

とにかく以上のようなホールデンにおける'...and all'のほとんど際限のない多用、反復は彼の性格と深く関係しているといえよう。つまりそれは、寮のトイレに取り付けられてある洗面台の冷たい水をただわけもなく「出したり止めたりする——ぼくの神経質な習癖」(turning the cold water on and off—this nervous habit I have. 35; 26)にも似て、情緒不安定な彼の性格を象徴しているのだ。それは一方においてはしまりのなさ、冗漫さを感じさせるものではあるが、しかし他方では、読者が反抗的にしてかつ神経質な性格のこの少年になにがしかの同情や共感を寄せる限りにおいて、そうし

た一つの様式と化した反復のレトリックはむしろ心地好い響きを伴って伝わってくるのである。そしてこれが小説における文体の不思議さというもののなのであろう。

それにまた私はここで、かつて故金関寿夫氏が「アメリカ文学の言文一致」という論文の中で次のように述べたことがあるのを思い起こす。

...複文ではなく、単文を畳みかけていく連辞畳用文の多いアメリカ口語表現には語句の「繰り返し」が多いということにもあらわれている。これはブリッジマンも暗示しているけれど、繰り返しは多くの場合、発話者の意識の深層——無意識の部分——から出てくるとされている。¹⁰

金関氏の論文では『ライ麦畑』の語りが射程内に入っておらず、それはアメリカ口語の表現一般について論じたものである。しかしその論旨は『ライ麦畑』の語りにおける語句の反復、繰り返しにもある程度適用できるもののように思われる。ホールデンは、形容詞を含めたさまざまな単語、あるいは語句を一度使うと、一定期間その同じ単語ないしは語句を繰り返し、繰り返し使用する傾向があり、その典型的な例が本稿の〈その四'lousy'をめぐる諸問題〉取り上げることになる形容詞'crumby'の頻発によくあらわれている。そしてそうした反復、繰り返しの傾向もやはり語り手ホールデンの意識の深層から発していると考えた方が、『ライ麦畑』を鑑賞するうえで非常に重要なことだと私は思うのである。しかもこの傾向こそがそれこそ一種の魔術的な力をもって若い読者の心を捉えるのだと言ったら、この作品の褒めすぎということになるであろうか。

注

- 1 以下OEDと略す。
- 2 R. L. Stevenson, *Treasure Island* (1883) [市河三喜編注：研究社・昭和24年・第16版], 72. 以下『宝島』からの引用は、このテキストのページ数を本文内に示す。
- 3 『ハック・フィン』では'...and all'の例が非常に少ない。なおここで蛇足を加えるならば、『ジーニアス英和辞典』(1994)を開くと、「and all ((略式)) (1)[無冠詞の名詞の後で]すっかり,...ごと He jumped into the water clothes and all.彼は服ごと水に飛び込んだ」とあるが、これは'water'と'clothes'の間にコンマを入れるべきものではない

- か。 Cf. *She flung the tea back, spoon and all...* (彼女はお茶をスプーンごと投げ返した) —Emily Brontë, *Wuthering Heights* (1847; Modern Library College Editions, 1950), 13. 以下『嵐が丘』からの引用はこのテキストのページ数を本文内に記す。
- 4 John Dos Passos, *Three Soldiers* (1921; Houghton Mifflin Co.: Sentry Edition, 1949), 52. 以下『三人の兵士』からの引用については、このテキストのページ数を本文内に記す。
- 5 以下 *WNID3* と略す。
- 6 この 'were occupied and all' における '...and all' は、ハーディの『テス』の次の引用に見られる '...and that' と同じ述語的 (predicative) 使い方であるが、こちらの方は、これを使う番人の身分からしてイギリスの方言的言い回しと考えていいのであろう。 "Oh —nothing, miss," he answered. "Marlott is Marlott still. Folk have died and that," —Thomas Hardy, *Tess of D'Urbervilles* (1891; Penguin Books, 1985), XXXVIII, 326. (「いやあ—何もないね、お嬢さん」と彼は答えた。「マーロットはいつまでたってもマーロットさ。ひとが死んだのなんだのという話ばかりで」)
- 7 以下 *OEDS* と略す。
- 8 Louis Kuethe, "Johns Hopkins Jargon," *American Speech*, VII, 5 (June 1932), 334.
- 9 私がここで言っているのは '...and all those things' のことであって、単独の 'all those things' のことではない。したがってホールデンがサリーに向かって述べる次の言葉とは区別して考える必要がある。
"We'll have oodles of time to do those things—all those things" (172;133)
- 10 金関寿夫「アメリカ文学の言文一致」は『ロマン派文学とその後—加納秀夫教授退任記念論文集』(研究社・1980), 217-233. に収められている。

その二 '...and crap' その他について

ここでは '...and all' と同類の語句であるが、しかしそれとは若干ニュアンスの異なる '...and stuff'、'and all that stuff'、'...and crap'、'...and all that crap' 等々の成句について考える。

- 1) I left all the foils and equipment and stuff on the goddam subway. (6; 3)
ほくは剣や装具やなんかをそっくりあの地下鉄に置き忘れてしまった。
- 2) I told him I was a real moron, and all that stuff. (17; 12)
ほくは本物のうすのろで、とかなんとか先生に言ってやった。
- 3) It was always rusty as hell and full of lather and hairs and crap. (35; 27)

剃刀はいつもひどく錆びついていて、石鹸の泡だとか毛だとかいっばいくっついてた。

- 4) My aunt's pretty charitable—she does a lot of Red Cross work and all—but she's very well-dressed and all, and when she does anything charitable she's always very well-dressed and and has lipstick on and all that crap. (148; 114)
 ぼくの叔母はなかなかの慈善家なんだ——赤十字の仕事かなんかをいっばいやっているんだ——が、服装やなんかに大変気をつかう方だ。それでなにか慈善の仕事をするときでも、いつも着飾って口紅をつけたりなんかするのさ。

- 6) ...and all that David Copperfield kind of crap (3; 1)

...そういったデーヴィッド・コパフィールド風のくだらない話

いまここにそれぞれ'...and stuff'、'...and all that stuff'、"...and crap'、'...and all that crap'などを含む引用文を『ライ麦畑』の中から五つだけ選んでみたが、これらの中の1)に含まれる'...and stuff'は古くからある成句で、*OED*は「同じような役に立たず、面白くない事柄」(and such-like useless or uninteresting matters. colloq.)と定義づけ、口語的表現だという。そして次のような古い例を挙げている。

?1697 She turned to me and said. 'Lewis, I find you pretend to give the Duke notions of the mathematics, and stuff.'

彼女はわたしの方を向いて言った。「ルイスさん、あなたは公爵殿に数学やなんかのくだらない考えを吹き込むつもりなのね」

これは『ハックルベリー・フィンの冒険』ではつぎのように受け継がれている。

...and he called the turnips and stuff “julery” (III, 14)

...そして彼はカブやなんかを〈宝石〉と呼んだ....

ところが引用文2)'...and all that stuff'はというと、大方の辞書には成句として出ておらず、ただ『ランダムハウス英和辞典』第二版だけは「(話)その他何やかや」という訳語を与えている。しかし同辞典の第一版には出て

いないところを見ると、その後第二版の编者たちが『ライ麦畑』その他のテキストを参照して、成句として持ち込んだのかもしれない。大方の辞書に載っていないといっても、ホールデンがかなりの頻度で使っているという事実を私たちは重く受け止めなければならないだろう。

『ハック・フィン』においては、'...and all that stuff'は非常に少ないけれども、次のような例が見られる。

“How does I talk wild?”

“How? why, hain't you been talking about my coming back, and all that stuff, as if I'd been gone away?” (XV, 119)

「どうして夢みてえな話ってことになるんだ？」

「どうしてだって？ だっておらが戻ってきただのなんだの、まるでおらがどっかへ行ってみたいいなしゃべり方じゃねえか」

さらに一九二一年の用例として次のような面白いものがある。これはドス・パソスの『三人の兵士』からの引用。

“Oh, he said that war was wrong and all that goddamed pro-German stuff.”
(114)

「なんと、あいつはこう言ったんだ——戦争は間違ったもので、みんな忌々しいドイツ寄りの産物なんだってね」

やはり大方の辞書は'...and all that stuff'をもっと積極的に成句として記載すべきでないか、と私は思う。

ところで、'...and all'と類似した意味で使われ、しかし『ハック・フィン』や『ライ麦畑』に見られない口語的成句として'...and that'、'...and all that'、'...and the like'等がある。

'...and that'については、研究社『英和大辞典』は「(2) and that ((英口語))= and all that」と記述し、『ランダムハウス英和辞典』第二版は「and that ((英非標準))...など」と説明している。もしこの説明が正しいとすれば、'...and that'はイギリス英語ということになり、『ハック・フィン』や『ライ麦畑』に登場しないというのも分かる気がする。しかしアメリカで使われないとは断言できないのではないか。

なるほど'...and that'はイギリスの古くから使われてきて、たとえば市河

三喜博士はスティーヴンスンの『宝島』の'a little cold water and salts and that' (272)と関連づけて、次のような例文を挙げている。

Dob reads Latin like English, French and that.—Thackeray, *Venety Fair*

また'...and that'は名詞の羅列との関連のみならず、述語的(predicative)にも使われる。すでに本稿の「その二」の注6で触れておいたことであるが、もう一度繰り返して言うならば、ハーディの『テス』に見られる次の例がそれである。

“Oh—nothing, miss, ” he answered, “Marott is Marott still. Folks have died and that.”

「いやあ—何もないね、お嬢さん」と彼は答えた。「マーロットはいつまでたってもマーロットさ。ひとが死んだのなんなのという話ばかりで」

そしてこの'...and that'が『ライ麦畑』の'...how my parents were occupied and all'の中の'...and all'と同じ用法であることも、既に述べておいた通りである。

しかし名詞と並列的に使われる'...and that'はアメリカでも使われており、ストウ夫人の『アンクル・トム的小屋』には次のような例が出てくる。

“You see,... I takes a leettle care about the unpleasant parts, like selling young uns and that....”¹

「ご承知のように、... 子供やなんかを売るというような、いやな役目には少しは気をつかうんですよ...」

ただ述語的に使われる'...and that'だけは、アメリカでは見られないのかもしれない。(むろんそう断言できるだけの自信は、いまの私にはないのだが)

つぎに'...and all that'であるが、*OED*は「その他なにやかや、等々」(and the rest of it, *et cetera*)と定義し、次のような十八世紀初期の例文を挙げている。

1702 They did it to Purpose, carried all before them, subdued Monarchy, cut

of their King's Head, and all that.

彼らはそれを成功裡に果たし、破竹の勢いで王政を倒し、彼らの王の首を刎ねたりした。

そしてこれも『アンクル・トム的小屋』に登場する。

“Tan't, you know, as if it was white folks, that's brought up in the way of 'spectin' to keep their children and wives, and all that.” (7)

「あなたもご存じでしょうが、妻子やなんかを手許に置いておくことを当然のこととして躰けられた白人とは事情が違いましてね」

さらに二十世紀の用例としては、これまたドス・パソスの『三人の兵士』に三例ほど見られる。

“I never thought I could stand being in the army, bein' a slave like an' all that, an' I'm still here.” (107)

「おれは軍隊に入って奴隷やなんかのようになるのは耐えられるもんじゃないとばかり思っていたが、まだこうしてここにいる」

一九三五年、あるアメリカ滞在中のイギリス人記者が、アメリカで使われている多くの口語的表現は古き良き英語が墮落して出来たもので、'...and all that'などはかつてバイロン卿も使っていた、といった意味のことをロンドン『デーリー・テレグラフ』紙に伝えたことがあるという。²ということは当時この成句がアメリカで日常的に非常によく使われていたことになるだろう。

また'...and the like'も古くからイギリスで使われてきた成句であるが、ドス・パソスの『北緯四十七度線』に出てくる登場人物の会話の中に次のような例がある。

“Schoolbooks and the like, for Truthseeker, Inc., of Chicago.”³

「教科書とか、そういったものさ。シカゴの真理探求社の仕事だよ」

以上『ライ麦畑』に出てこない語句についていたずらに紙数を割いた感じもないではないが、'...and that'、'...and all that'、そして'...and the like'等が

どうしてホールデンの語りに登場しないのかふと不思議に思ったからである。それはひとえにホールデンの好みによるものなのであろうが、一九五〇年代前半のティーンエイジャーたちは、そうした成句に見向きもせず、もっぱら'...and all'、'...and stuff'、'...and crap'に魅せられていたということなのであろうか。つまり後者の方がより多くの軽快さを帯びた口語的言い回しと感じられたということなのかもしれない。

さて、本章の冒頭に並べた引用の3)'...and crap'および引用の4)'...and all that crap'は'...and stuff'と'...and all that stuff'を母体として発生したものと考えられるが、前者の二つの成句、つまり'...and crap'および'...and all that crap'は一般の辞書には載せられてはいない。『ランダムハウス英和大辞典』第二版にも取り入れられていない。ただ'crap'を含む多くの用例を列挙している *Random House Historical Dict. of American Slang, Vol. I, (1994)* は'...and all that crap'について次のようなヘンリー・ミラーからの引用を載せている。

1934 H. Miller *Tropic of Cancer*. Can you picture her moving in here with her big trunks and her hatboxes and all that crap she drags around with her?
彼女がでっかいトランクや帽子ケースなんかを引きずってここへ入り込む姿なんて想像できますか？

ところが大変有り難いこのアメリカ俗語辞典でも、'...or crap'の用例はあるものの、肝心の'...and crap'を含む用例は載せてられていない。『ライ麦畑』からの引用があってもよさそうなのに、と私はいささか不満に思う。

それはともあれ、『ライ麦畑』の文体という観点からすれば、'...and all that crap'という成句は英語学的な視点とは自ずと異なった面白さが浮かび上がってくる。

それはどういうことかという、先に並べた『ライ麦畑』からの引用文のうち、'My aunt's pretty charitable...'で始まる文章4)をもう一度読み返してもらいたい。ここではホールデンはまず'...and all'を二度繰り返して使った後、'...and all the crap'という、彼の叔母に対する極めて辛辣な調子の成句でこの文章を締め括っていることに気付くであろう。これは大変効果的な成句の並べ方であるように私には思える。

それからもう一点。先に『ライ麦畑』から引いて並べた五つの引用の中の5)、即ち'...and all that David Copperfield kind of crap'じつは'...and all that crap'の一大変種なのである。ちょうど先に引用した『三人の兵士』の中の

'...and all that goddammed pro-German stuff'と同様に、ホールデンは、'...and all that crap'を二つに引き裂いて、'...and all that'と'crap'の間に'David Copperfield kind of'を押し込んだというわけだ。そしてここに'...and all that David Copperfield kind of crap'という奇抜なレトリックが誕生することになったのである。

それにしても「そういったデイヴィッド・コパフィールド風のくだらない話」とは、いかにも天下の大文豪チャールズ・ディケンズに対する失礼な物言いである。むろんこれは、語り手ホールデンの、ないしは作者サリンジャーの一種の気負いがあったることであることはいうまでもない。

主人公にしてかつ語り手であるという点においては互いに共通するホールデン・コールフィールドとデイヴィッド・コパフィールドではあるが、それぞれの語る物語の長さという点では雲泥の差がある。それはまさに巨象と仔馬の如きものだ。それぞれの物語の作者であるサリンジャーとディケンズにおける長篇作家としての力量の差もまた歴然としている。なにしろサリンジャーは長篇を書けない作家、長篇の構想力を最後まで発揮できなかった作家である。そしてこのことに私たちが思いを馳せるとき、「そういったデイヴィッド・コパフィールド風のくだらない話」というホールデンの気負いの言葉にはある種の隠された劣等意識の裏返し、虚勢、突っ張りにも似た心情が潜んでいたような気もしてくる。しかしそれでもやはりホールデンにとって何にもまして癩に触るのは、『デイヴィッド・コパフィールド』の書き出しであったに違いない。なにしろその第一章は「出生」(“I Am Born”)と題され、冒頭の一節は以下のようになっているのだから、それがホールデン少年の癩に触ったとしても無理からぬことであつた。

私は私の人生物語を出生から始めるために、(これまで他人から教えられ、そう信じてきたように)ある金曜日の夜中の十二時に生まれた、と記しておこう。つまり時計が十二時を打ち始めると同時に、産声を上げたということになっていたのである。⁵

ホールデンはこの種のいかにも十九世紀小説風リアリズム——決してクソリアリズムなどではないはずだが——の語りが苦手なのだ。彼がイギリス小説が嫌いだというのではない。ハーディーの『帰郷』やモームの『人間の絆』の愛読者であるホールデンが『デイヴィッド・コパフィールド』

の優れた物語性、迫力を理解できなかったはずはない。ただ彼としては、もっとモダンな、軽快でリズムカルな語りこそ二十世紀小説にふさわしいと考えていたに違いない。そして彼流の新たな語りの模索のうちに、いささか生意気な決意や抱負がわき起こり、'...and all that Copperfield kind of crap'というホールデンらしい言い方の出現となったのであろう。

なお'crap'という語は、〈駄作〉という意味ですでに一九三〇年代から使われているのであるが、これについては次の章で触れることにする。

注

- 1 Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin* (1852; Washington Square Press, Inc., 1962), 7. 以下『アンクル・トムの小屋』からの引用は、このテキストのページ数を本文内に示す。
- 2 H.L. Mencken, *The American Language: Supplement One* (Alfred Knopf, 1945), 67.
- 3 John Dos Passos, *The 42nd Parallel* (1930) in *U.S.A* (Boston: Houghton Mifflin Co., 1960), 88. 以下『北緯四十二度線』からの引用は、このテキストのページ数を本文内に示す。
- 4 J.E. Lighter, *Random House Historical Dictionary of America Slang*は、以下HDASと略す。
- 5 Charles Dickens, *David Copperfield* (1849-50; A Signet Classic 1960), 13. 以下『ダイヴィッド・コパフィールド』からの引用は、このテキストのページ数を本文内に示す。

その三 'crap'の素性と用法

それではアメリカ的俗語の一つである'crap'とは、いったいどんな素性の言葉であろうか。

'crap'は中期英語(Middle English)で'crappe'と言ひ、もともと「糞、残り滓」などを意味する語であった。そしてこれがイギリス方言で「糞」を意味するのにも使われるようになったのである。たとえばEDDは「糞、またひどい侮辱語としても用いる」(Ordure. Also used as a term of gross insult.)と説明し、用例として'What crap's that y'er talkin'? (何をばかなことを言っているんだ)を挙げている。これがアメリカ語の'crap'とどのような経路を経てつながるようになったのか、よく分からないが、OEDSを覗いてみると、文字通り「糞」を意味する'crap'の用例が上記EDDの定義から一足飛びにドス・パソスの『マンハッタン乗換え駅』(1925)へと移り、やがて

「ライ麦畑」に至る。

1925 J.Dos Passos *Manhattan Transfer* You don't want to shovel crap...all your life.

お前は汚物処理をして...一生を終えたくないだろう。

1951 J.D.Salinger *Catcher in Rye* There didn't look there was anything in the park except dog crap.

公園は犬の糞以外に何もないみたいだった。

Eric Partridgeの*A Dict. of Slang and Unconventional English* (1961)によれば、'crap'が「排便」の意味で使われ出したのは十九世紀からだという。また同辞典第二巻「補遺」(1970)の説明によれば、「屑、廃物」の意味で使われ出したのは一九二〇年あたりからということになっている。さらに既出の*HDAS*を覗いてみると、アメリカで'crap'が'shit' (糞便) の婉曲語として使用されるようになったのは二十世紀になってからだということが分かる。

じつは上述の*OEDS*に引用されているドス・パソスの『マンハッタン乗換え駅』の例文は、中間を若干省略してあるためにmisleadingなところがある。完全な文章は次のとおりである。

“But Congo, why dont you come too? You dont want to shovel crap in a stinking ship's galley all your life.”¹

「ところでコンゴ、お前も一緒に来たらいいじゃねえか。臭い船の調理場で一生残飯片付けなんぞしたくねえだろう」

つまり*OEDS*の引用では、この'crap'がいかにも文字通りの〈糞〉のような印象を読者に与えてしまう危険がある。しかし船の調理場であるからには、残飯などの意味であろう。文字通りの〈糞〉の意味を持つ'crap'は、*HDAS*に引かれている次の例がそれに当たるであろう。

1931 Dos Passos 1919 128: The regulars...were digging trenches and shovelling crap and fighting malaria and dysentery and yellowjack.

正規兵たちが塹壕を掘り、糞をシャベルですくい、マラリアや下痢、

そして黄熱病と戦っていた。

ところで前述の「『ライ麦畑でつかまえて』の言語」という論文を書いたらコストロ氏は、ホールデンの語りにおける'crap'の使い方は七通りに分けられると言う。コストロの引用は次の通りである。²

- 1) <all that David Copperfield kind of crap> (3; 1) (そういったデイヴィッド・コパフィールド風のくだらない話)
- 2) <I spilled some crap all over my gray flannel.> (34; 25) (おれのグレーのフラノには汚いものをあちこちこぼしてしまったからな)
- 3) <I was putting on my galoshes and crap.> (47; 36) (ぼくはオーバーシューズかなんかを履こうとしていた)
- 4) <there didn't look like there was anything in the park except dog crap.> (153; 118) (公園は犬の糞以外は何もないみたいだった)³
- 5) <The show was on the crappy side.> (163; 125) (芝居はどっちかというところつまらなかった)
- 6) <to be all a lot of crap.> (49; 37) (嘘っぱちであること); <to shoot the crap.> (50, 38; 71, 55) (おべんちゃらを言うこと); <to chuck the crap.> (73; 56) (でたらめを言うこと)
- 7) <I certainly wouldn't have minded shooting the crap with old Phoebe for a while> (87; 67) (妹のフィービーとならしばらくお喋りをしても気にならなかったらう)

俗語的表現の意味の説明に詳しい『ランダムハウス英和大事典』第二版によれば、'crap'の語義は、a)糞、b)排便、c)汚物、d)下痢、e)世迷い言、f)くず、g)ヘロインなどということになる。a)排便、d)下痢、g)ヘロインの三つの意味以外は、その形容詞形(crappy)も含めてすべてがホールデンの守備範囲に入っていることになる。これはホールデンがいかにこの語を愛

用しているかを示すものである。引用7)はコストロ氏も言うように、「世迷い言」や「でたらめ」などという悪い意味ではなく、普通の「お喋り」に近い。

なお形容詞の'crappy'については、ホールデンはただ一度だけしか使っていないが、*HDAS*によれば、「軽蔑すべき、みすぼらしい」という意味ですでに一九二〇年代から使用されている。また一九三二年にジョンズ・ホプキンス大学の学生スラングを調査した人によれば、'crappy'(=boastful; nonsensical; no good)は学生仲間で使われていた語でもあったという。⁴

ただこれまた*HDAS*によれば、'crappy'は四〇年代に「体調・気分が悪い」の意味にも使われるようになったらしく、この辞書は〈1965 N.Y.C. high-school student: Still feelin' pretty crappy〉の例を挙げている。いうまでもなくホールデンならば'feeling pretty lousy'と言うところで、これは一九五〇年代と六〇年代におけるニューヨークの高校生の言葉遣いの変化を示すものなのかもしれない。

ホールデンが成句'...and all that crap'をいかに効果的に使っているかについては、本稿〈その二'...and crap'その他〉について述べておいたつもりであるが、'crap'に関する語法にもう少しこだわってみたい。

'...all that David Coppefield kind of crap'の'crap'は、*HDAS*に引用されているヘミングウェイの書簡の言葉、つまり〈1932 a copy of the book of Faulkner's early crap〉(フォークナーの初期の駄作)の'crap'と同じ意味である。また『ライ麦畑』では次のような使い方もされている。

“Now, cut the crap,.” he (=Stradlater) said. (39; 30)

「いいかげん馬鹿な真似はよせ」

“Cut the crap, now. Let's have it.”

「もうつべこべ言うのはよせ。さっさと金を出すんだ」

前者はストラドレーターというホールデンのルームメイトの言葉。後者はモーリスというポン引き役もするホテルのエレベーター・ボーイの言葉。いずれも荒っぽい言葉遣いをする。『ランダムハウス英和大辞典』第二版は、〈Cut the crap〉(ばかにするな; でたらめを言うな)という用例を挙げているが、上のストラドレーターの言葉からも分かるように、「馬鹿な行為はよせ」という意味にもなることはいうまでもない。またついでに

言えば、'cut the crap'も一九三〇年代のキャンパス・スラングとされている。⁵ただキャンパス・スラングといっても、学生たちだけがそれを使うわけではなく、もともと一般社会で使用されていたものがキャンパスに侵入してきたのだということも忘れてはいけない。

面白いのは、ホテルにおいて売春婦の小娘サニーとホールデンが交わす次のような会話とそれについての彼の解説である。

“Hey, how old are you, anyways?”

“Me? Twenty-two”

“Like fun you are.” (123; 94)

「ねえ、いったいあんた、何歳なの？」

「おれ？二十二だよ」

「嘘でしょう」

このあとホールデンは、サニーの“Like fun you are.”はいかにも子どもっぽい言い方で、「売春婦なんか」(a prostitute and all)だったら、“Like hell you are.”(なにが二十二さ)とか、“Cut the crap.”(でたらめ言うんじゃないよ)とか言うはずだと説明を加える。つまり女性が使う言葉としては、〈Cut the crap〉は売春婦にふさわしいというわけだ。こうしてホールデンは言葉遣いの説明によって、サニーという小娘がプロの売春婦ならざる所似を示唆しているのだ。

コストロ氏が'crap'の六番目の使い方として挙げている'shoot the crap'については、Harold Wentworth and Stuart Berg Flexner, eds., *Dict. of American Slang*, 1975)⁶は、'shoot (the) crap' [taboo]='shoot (the) bull'として双方の用例を「ライ麦畑」から引用している。

So I shot the bull for a while. (17; 12)

それでしばらくの間おしゃべりをしてやった。

And they weren't just shooting the crap. (50; 38)

まんざらでたらめなお世辞を言っているのではなかった。

この場合の'bull' (ばかな話、お世辞、内容のない話)はアメリカの俗語で、*HDAS*では一九二〇年の用例から始められている。そして'shoot the

'bull'については、一九一九年の用例を挙げている。

1919 Some Americans...began shootin' the bull.

何人かのアメリカ人がおしゃべりを始めた。

'shoot the crap'は'shoot the bull'のアナロジーとして後から出現したのもであらう。HDASは〈1978 "Sounds like a lot of crap shootin' to me." (僕にとっては根も葉もないたわごとのように聞こえる)〉を引いているのみである。また上記の一九三二年のキャンパス・スラングとしては、'crap shooter' (=one who talks nonsense)は紹介されているけれども、'shoot the crap'は見られない。⁷

ところで『ライ麦畑』には「無駄話、おしゃべり」を意味する語句が、ほかにも'chew the rag' (35; 26)、'chew the fat' (138; 106)、'shoot the breeze'(261; 201)等かなり使用されているが、これらはみなそれぞれ古くから使われてきたアメリカの俗語である。これに対して'chuck the crap'〈Then I really started chucking the old crap around. (73, 56)〉(それからぼくは本当におべんちゃらをふりまき始めた)は一般には珍しい使い方のようにだ。'chuck'は「放る」を意味するアメリカの俗語で、ホールデンがさかんに愛用する語でもある。したがって'throw the bull'、'shoot the crap'のアナロジーで、'chuck the crap'が出現するというのも分かる気がするのだが、これがホールデンの造語(neologism)のかどうか。このところがよく分からない。

このようにホールデンは'crap'の多様な意味を巧みに使い分けて、芸術的効果を上げているわけであるが、ただ次のような語法は避けている。

- 1) 1929-30 J.T. Farrell *Young Lonigan*: He will kick the crap out of you. (彼はお前を徹底的に痛めつけるであらう)
- 2) 1947 Willingham *End As a Man*: What the crap do I care. (なにかまうものか)
- 3) 1951 Kerouac *Cody*: Nobody made a move to notice or even gave much of a crap. (だれも気づいた風をみせなかったし、たいして気にかげさえしなかった)

いずれも *HDAS* に挙げられている用例を借用したものである。用例は時期的に最も早いものを選んでみた。そして分かることは、ホールデンがどういうわけかこの三種類の 'crap' の用法を避けているということだ。そのような用法の代わりに、彼は、1) および 2) については 'the hell' を、そして 3) については 'a damn' というように必ずより〈伝統的な〉語法を用いる。つまり彼の言語の使用法は、この点に関する限りやや保守的でラディカル性に欠けるということである。

アメリカでは 'crap' が 'shit' の婉曲語法 (euphemism) として、二十世紀に入ってから使われだしたことはすでに触れた。したがって上に並べた三つの引用の中の 'crap' は、すべて 'shit' で置き換えることが可能で、たとえば *OEDS* に引用されている次のようなジェイムズ・ジョイスからの例などはほんの一例にすぎない。

1922 Joyce *Ulysses* He's a whitearsed bugger. I don't give a shit for him.
(あいつなんかお尻の生白い糞ったれ野郎だよ。あんなやつ、どうだ
っていいんだ)

そもそも 'crap' は 'shit' とは違って、アングロサクソン時代から「糞」の意味で使われてきた正統的な言葉で、ドイツ語の 'Schei ße' に相当する。そして「糞」のほかに「無意味な物、馬鹿げたこと、くだらない人間、麻薬」、そしてまた嫌悪感を表す間投詞等とさまざまな意味や使い方があることは周知のことである。じじつ *OEDS* では、そうした意味や使い方を示す用例が D. H. ロレンス、E. M. フォスター、ジェイムズ・ジョイス、オルガス・ハックスレー等から多数引かれている。ここでついでにアメリカ小説からの用例を若干引いておくと、次のようなぐあいである。最初の二例はドス・パソスの『北緯四十二度線』と『一九一九年』、三番目と四番目はそれぞれノーマン・メイラーの『裸者と死者』およびラルフ・エリスンの『見えない人間』からのものである。

“Shit, let's try pick 'em up.”⁸

「くそっ、あの女どもを引っかけてやろうじゃねえか」

“S— t I was scared pissless.”⁹

「いやはや、おれは怖くて小便も出なかったよ」

“Let's cut out that 'kood-sigh' shit,” he roared at the Jap.¹⁰

「その『くうださい』とかいうやつは止めにしなよ」と彼は日本兵に向かって怒鳴った。

“Brothers are the same color; how the hell you call these white men brother?

Shit, mahn. That's shit!”¹¹

「兄弟というのは同じ色をしているもんだよ。一体何だってこうした白人どもを〈兄弟〉と呼ぶんだい？ くだらんよ、お前。ナンセンスというもんだ！」

最後の例はエリスンの『見えない人間』における民族主義的な黒人運動家の説教師ラスという男の言葉で、同じ黒人でも、主人公にして語り手の『見えない人間』の方は次のように'crap'を使っている。

“If that was incorrect, then I did wrong, so say it straight without this crap.”¹²

「もしあれが正しくなかったら、おれが間違っただけをしたんだ。だからぐじゃぐじゃ言わないで、ストレートにそう言ってくれ。」

しかし『ライ麦畑』は'shit'という言葉とは無縁の世界である。ホールデンは、いわば'shit'の婉曲語法としての'crap'を安心して思いっきり使用している感じもないわけではない。

一九六〇年代以降のアメリカでは'shit'がやたらと使われるようになり、ヴェトナム戦争を背景に麻薬の密売を描いた名作、ロバート・ストーン『ドッグ・ソルジャーズ』を開くと、'shit'が数えきれないほど頻繁に使われているのが分かる。（と同時に'fuck'や'fuckingも）たとえば

I went there out of spite anyway—shit like that doesn't bother me as much as it does you.¹³

わたしはとにかく腹いせにあそこに行ってみました。...こうしたことは貴方とは違ってわたしはあまり気にしませんから。

というぐあいだが、これは若い女性がヴェトナムにいる夫宛てにニューヨークの近況を報告している手紙の中の言葉である。そしてこの物語の登場人物は、ホールデンの使う意味での'crap'つまり麻薬という意味以外に'crap'を口にすることがない。しかしほかの作品では、同一人物が同じような意味での'shit'と'crap'をほとんど同時に使うこともある。次の例も、ヴェトナム戦争小説の傑作であるティム・オブライエンの『カチアートを追って』からのものである。

“Maybe he can straighten this shit out.”¹⁴

「ひょっとしたらあいつならこの事態を打開できるかもな」

“What sort of silly crap is this—walking to gay Paree?”¹⁵

「花のバリまで歩いて行こうなんて—こんな馬鹿な話があるか？」

また十年ほど前にベストセラーとなったウィンストン・グルームの『フォレスト・ガンプ』は、『ハック・フィン』と『ライ麦畑』の文学的伝統を意識して多様な方言と俗語を駆使した一人称小説であるが、これまたヴェトナム戦争時代が舞台、ないしは背景となっているだけに'shit'の乱用が全篇にわたって目につく。と同時に、‘...an crap like that’¹⁶というぐあいにホールデンと同じ言い回しもあるということはいうまでもない。

1) But it was a lot of killin an shooting an shit like that, too. (20)

しかしそれはまた殺し合いや撃ち合いといったものがたっぷりある映画だった。

2) That night, everybody going to parties an shit.... (31)

その夜みんながパーティーやなんかに行く予定だった。

3) I didn't give a shit no more. (65)

ぼくはもうどうでもよかった。

4) “Say, this shit ain't near done yet,” he said.

「おい、こいつはまだ生煮えもいとこだよ」と彼は言った。

ざっとこんなぐあいであるが、ホールデンならば、1) の'...and shit'の代わりに'...and stuff like that'を、2) の'...and shit'の代わりに'...and stuff'ないしは'...and crap'を、3) の'give a shit no more'の代わりに'give a damn no more'を、4) の'this shit'の代わりに'this stuff'を使うところである。

「《米俗》ヘロイン」を意味する'crap'についていえば、これが『ライ麦畑』に登場しないのは当然のことで、五〇年代初期のハイスクールの世界は、一応ドラッグとは縁がないうえに、麻薬という意味で'crap'が使われるのは、HDASの文献に見る限り『ライ麦畑』の出版以後のことである。これが『ドッグ・ソルジャーズ』になると、次のような用例が出てくる。

“I hope you're not doing this crap.”¹⁷ (12)

「あんたがこのヤクをやっているわけではないだろうね」

そうはいつでも、『ライ麦畑』の世界が麻薬という言葉と完全に無縁であると言い切るのは必ずしも正確ではない。ホールデンが出かけて行ったグレニッチ・ヴィレッジのナイトクラブは大変暗かったので、「かりに麻薬常習者だとしても、誰も気につけないであろう」(You could even be a dope fiend and nobody'd care. 111; 85)というのが彼の弁である。ただ'dope'というアメリカ起源の言葉は、十九世紀終わり近くに麻薬の意味で使われてきたごく普通の言葉である。そしてホールデン自身は麻薬とはなんの関わりもない。

『ライ麦畑』の作者サリンジャーより五歳年長のウィリアム・バローズが自伝的麻薬常習者の物語『ジャンキー』(Junkie)をJunkという原題で[そしてWilliam Leeのペンネームで]刊行したのは、一九五三年。'Junkie'とはホールデンの言う'dope fiend'のことだ。

“He keeps saying, ‘I don't care about you damned junkies.’”¹⁸

「あいつはいつもこう言うんだ——『お前らのような忌まわしいジャンキーどもなんか、どうだっていいんだ』ってね」

バローズは自分の最初の麻薬体験は第二時世界大戦中の一九四四年か四五年のことだと物語の冒頭で語っている。他方、サリンジャーよりも三歳年少のビート作家ジャック・ケルアックは、『ライ麦畑』の翌年の一九五

二年に'benny'と呼ばれる麻薬を作品に登場させている。[HDASによる]

1952 Kerouac *Cody We had to...go into Houston and get a gross of benny.*
(ぼくらはヒューストンの町中に入ってベンゼトリン錠剤を十二ダース入手せねばならなかった)

'benny'という語はむろん『ジャンキー』にも登場する(157)。そしてホールデンの'a dope fiend'に相当する『路上』におけるケアルックの用語は'a benny addict'であった。

話が'crap'そのものからかなり逸脱した感じになってしまったが、とにかくサリンジャーは一九六〇年代後半まで創作を続けはしたものの、彼の文学的感性と想像力はいくまでも五〇年代前半のものであるとともに、また同世代ではあっても、ビートの麻薬の世界とははっきりと一線を画する作家であったという事実を強調したかったのである。一九五〇年代前半、サリンジャーと同じくケアルックも精神的叡智と救いの道を求めて仏教と真剣に取り組んでいたが、両者におけるアプローチの仕方と創作のスタイルはまるで違う。

主人公のホールデンは、そして作者のサリンジャー自身も、ビートの作家のように現実には東部を逃れて西部その他を放浪しつづけることはない。またホールデンにおける西部の夢ですら、その内実においてケアルックたちの抱く西部の夢とは相当の径庭があった。西部の夢の中のホールデンは決して森の奥深く入って行こうとはしない。

...僕は稼いだお金でどこかに小さな小屋を建てて、生涯そこで暮らそう。そして小屋は森のすぐ近くに建てよう。森の中じゃ駄目だ(*but not right in them*)。小屋はしょっちゅう陽がよく当たるようにしておきたいから。(258; 199)

そして聾啞を装い、美しい聾啞の娘と結婚し、子供を育て、汚れた世間とのコミュニケーションを断ちながら彼流の〈転落以前の樂園の無垢〉(*the prelapsarian innocence of Eden*)を保ちつづけようというのだ。そしてそれがいかに現実味に乏しい、泡のような夢にすぎなかったかということは、物語の結末によく示されている。つまりホールデンの自己救済は西部の夢とは違ったところでなされるのである。

注

- 1 Jon Dos Passos, *Manhattan Transfer* (Harpers & Brothers, 1825), 20.
- 2 Donald P. Costello, 176.
- 3 ホールデンは犬の糞のことをこのように'dog crap'というが、馬糞については、'horse manure' (6; 3)という。いや正確にはむしろこれは「馬糞」ではなく「たわ言」という意味で使われているのだが。一般に'horse manure'は'cow manure'「牛糞」とともに辞書には載せられていないようだが、*OEDS*には記載されている。アメリカに起源を持つ俗語'horse shit'(=nonsense)とともに「たわ言」を意味する'horse manure'が『ライ麦畑』以前のいつ頃から使われ始めたのだろうか。*HDAS* [*Random House Historical Dict. of American Slang*, Vol, II, 1977] は次のような例を引いている。1928 Dahlberg Bottom Dogs : That was all horse-manure. (それはみんなでたらめだった) なお引用2) の'there didn't look...'の'there'は'it'となるべきで、文法的にどう見ても破格である。
- 4 Louis Kuethe, "Johns Hopkins Jargon" in *America Speech*, VIII, (June 1932), 331.
- 5 *Idid.* 'cut the crap'— "Stop the nonsense.."
- 6 以下*DAS*と略す。
- 7 *America Speech*, 330-37. <'crap shooter—one who gambles with dices; one who talks nonsense.'> どうやら学生たちは'craps' (サイコロ賭博) と'crap' (糞) をごっちゃにしていたらしい。このほかに<'bull-shooter', 'to shoot the bull', 'throw the bull', 'crap—explanation of disgust; dormitory food; excrement.', 'full of crap—expression of disbelief or contempt. Nonsense'> 等の学生スラングも紹介されている。
- 8 Dos Passos, *The 42nd Parallel*, 63.
- 9 Dos Passos, *Nineteen Nineteen* (1932) in *U.S.A.* (Boston: Houghton Mifflin, 1960), 157. 『一九一九年』からの引用についてはこのテキストのページ数を本分内に示す。
- 10 Norman Mailer, *The Naked and the Dead* (1948; Holt, Rinehart and Winston, 1974), 193.
- 11 Ralph Ellison, *Invisible Man* (1952; A Signet Book, 1964), 321.
- 12 *Idid.*, 402.
- 13 Robert Stone, *Dog Soldiers* (1974; Penguin Books, 1987), 3. 以下『ドッグ・ソルジャーズ』からの引用はこのテキストのページ数を本分内に示す。
- 14 Tim O'Brien, *Going After Cacciato* (1978; A Dell Book, 1987), 17.
- 15 *Idid.*, 18.
- 16 Winston Groom, *Forrest Gump* (1986; Pocket Books, 1994), 20. つづく引用2)、3)、4) はすべてこのテキストからのもの。以下『フォレスト・ガンプ』からの引用は、このテキストのページ数を本文内に示す。
- 17 『ドッグ・ソルジャーズ』は麻薬の密売の物語だけに、さまざまな種類の麻薬語が多数登場する。'dope', 'crap', 'joint', heroin', 'shit', 'grass', 'smack', 'hash', 'scag' 等々。
- 18 Willam Burroughs, *Junkie* (1953; Ace Books, 1973), 71.
- 19 Jack Kerouac, *On the Road* (1957; Viking Penguin Books, 1979), 6.